

AIは、もはや教員の「分身」になる

子どもたちに本当に必要な力とは何か、そして教育現場がどう変わるべきか

(泰山先生のお話から)

これまでのAIは、インターネット上の不確かな情報で答えを出すリスクがありました。しかし、「Notebook LM」のような新しいAIは、指定された資料だけを基に正確な答えを生成します。教師は膨大な資料を読み込む手間が省け、子どもたちは教科書をAIに読ませることで、分からない部分を何度でも分かりやすく解説してもらえます。

「伝達講習」の終わり

AIは資料の内容を自然な音声でラジオのように解説したり、動画を作成したりする機能も備えています。これにより、国や県から人づてに伝えられていた伝達講習は不要となり、誰もが直接、深い内容を効率的に学べるようになります。

AIが知識を伝える役割を担う→教師の役割は大きく変化

「教科書の内容を分かりやすく教える」という点だけ見れば、AIに勝つことは難しくなるでしょう。しかし、AIにはできない、より重要な役割が生まれます。それは、「子ども一人ひとりの困り感」に寄り添い、成長をアシストすることです。AIが知識を補完してくれることで、教員は空いた時間を使って、以下のようなことに集中できます。

学びのコーチング：AIをどう使えばより効率的に学べるかを教えたり、個別の課題解決をサポートしたりする。

共感と支援：勉強でつまづいている子や、意欲を失っている子に寄り添い、個別の支援や発展的な学習を促す。

「自分で学ぶ力」を育む授業への転換

日本の教育はこれまで、先生が丁寧に教えすぎてしまった結果、「先生がいないと学べない」という課題を抱えるようになりました。新しい学習指導要領は、この課題を乗り越え、子どもたちが「学び続ける力」を身につけることをめざしています。

これは、文部科学省が例える「登山」に似ています。これまでは先生が「このルートが一番いい」と決めて、みんなで一緒に登っていました。しかし、これからは「ゴールは一緒でも、登り方は違う」という考え方で、子どもたち自身に学びを任せていく必要があります。

この自律的な学びを促すには、段階的なアプローチが重要です。

(次号以降でにつづきます)

知識伝達から「委ねる」授業へ

9/3、谷本先生に提案授業を行っていただきました。

授業前は、「使い方がわからない道具を渡されて『実演して』と言われているようで、どうすればいいか全然わからなかった」と、率直な不安を話してくださいました。これは、新しいことに挑戦する先生方の誰もが抱くリアルな気持ちだと思います。

しかし、授業研究部で授業案を考え、

対話を重ねるうち、授業イメージが膨らんでいき、本番に臨んでくださいました。その結果、生徒各々が他者の意見を参照したり、教え合ったりしながら、自分の考えを整理し、深めていく生徒たちの姿を見て、確かな手応えを感じられたそうです。

「不安」を「確信」に変える、具体的な収穫

授業後、谷本先生はこう振り返っておられます。「振り返ってみると具体的な課題が見えてきた。今回の授業形態での改善点や、今後どう活かしていくかの見通しがはっきりわかり、授業づくりへの意欲が高まった」

今まで課題だった教科書指導や文法指導にも今回の授業形態が使えないかなど、今後の授業改善への大きなヒントを得られたそうです。今回の挑戦は、先生ご自身の授業を大きく変えるきっかけになってのかもしれない。

これまで教育の主軸だった「知識の伝達」や「繰り返し演習」は、AIが最も得意とする領域になりつつあります。AIは瞬時に膨大な情報を検索し、個々の習熟度に合わせて問題を提供します。これは、教師が時間をかけて行ってきた多くの作業を代替するだけでなく、生徒が自力で知識を獲得できる時代が来たことを意味します。

これからの教育では、単に知識を教えるだけでは不十分です。**生徒たちが自ら課題を見つけ、情報を組み合わせ、深く思考し、新しい価値を創造する力が求められます。**

これこそが、AIには代替できない、人間ならではの力です。

「生徒が『わかった！できた！』『おもしろい！』と感じる瞬間を、一つでも多く作ってほしい」という谷本先生の言葉は、私たち全員の共通の目標です。「新しい授業」と聞くとも、身構えてしまうかもしれません。でも、今回の谷本先生のように、まずは一歩踏み出してみることで、日々の授業の悩みを解消する大きなヒントが見つかるかもしれません。